

# 「つきあかり」

## 【品種の特徴】

- 出穂期及び成熟期は「こしいぶき」に比べ4日早い早生のうるち種。
- 穂発芽性は難。
- 偏穂重型のため、茎数が確保しにくい。

## 【生育のめやす】

生育ステージ	葉数 (葉)	草丈 (cm)	茎数 (本/m <sup>2</sup> )	葉色 (SPAD)
最高分げつ期 (6月29日頃)	9.8~10.8	58~63	430~530	41~46
幼穂形成期 (7月3日頃)	10.3~11.3	67~72	420~510	41~46
2回目穂肥時 (7月10日頃)	11.3~12.3	83~88	410~490	42~46
出穂期 (7月24日頃)	12.0~13.0	—	400	40~42
成熟期 (9月1日頃)	—	稈長 78	—	—

## 【収量構成要素のめやす】

目標収量	660kg/10a
穂数	400本/m <sup>2</sup>
一穂粒数	85粒
m <sup>2</sup> 当たり粒数	34,000粒
登熟歩合	80~82%
千粒重	24.0g

## 【主な作業と生育ステージ及び管理のポイント】

時期	4月		5月		6月		7月		8月		9月	
	20		10	20	10	20	10	20	10	20		
主な作業と生育ステージ	は種		田植え		中干し		穂肥	穂肥	落水		収穫	
							幼穂形成期	出穂期			成熟期	

基肥施用	田植え	中干し・溝切り	病虫害防除	穂肥施用・水管理	収穫・乾燥・調製
<ul style="list-style-type: none"> <li>・基肥窒素量は分施の場合は7kg/10a、全量基肥施肥の場合は13kg/10aをめやすとする。倒伏しやすいので、地力の高いほ場では減肥する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・千粒重が大きいので播種量を増やす。</li> <li>・田植えは5月上旬に行う。</li> <li>・栽植密度は60株/坪以上とし、1株苗数は4~5本とする。</li> <li>・鳥害を回避するためほ場の団地化を図る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・中干し・溝切りを実施し、一度田面を固めて収穫時の機械作業が可能な地耐力を確保する。</li> <li>・中干し後、出穂前は稲体活力が低下しないよう土壌を乾かさないようにする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・葉いもち防除は、育苗箱施用等により必ず行う。</li> <li>・葉いもちの発生を確認した場合は、速やかに薬剤防除を行う。</li> <li>・穂いもち防除は、予防防除を行う。</li> <li>・斑点米カメムシ類の防除は、草刈り及び加害種に応じた薬剤防除を行う。</li> <li>・紋枯病防除は、前年の発生が多かったほ場では予防防除を行う。</li> </ul>	<p><b>【分施】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・穂肥は出穂期25~23日前(幼穂形成期・6月末頃)と14日前の2回に分けて施用する。</li> <li>・1回目の穂肥量は窒素成分で3~4kg/10a、2回目を2~3kg/10a、合計6kg/10aをめやすとする。</li> </ul> <p><b>【分施・全量基肥】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・出穂期頃までは葉色(SPAD値)40以上に保つ。</li> <li>・登熟歩合が低下しやすいので生育のめやすを大幅に超える場合は施用量を控える。</li> <li>・出穂期25日後まで飽水管理を基本とする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・収穫適期は積算気温1,000~1,100℃をめやすとし、黄化粒割合が90%になった頃とする。</li> <li>・胴割粒の発生を防止するため、乾燥は適正温度で行い、急激に乾燥させない。</li> </ul>